

VOLUME
110
JULY
2009

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Yada 52-1, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526 Japan

inside NEWS



開学記念行事

● CONTENTS ●

平成21年度入学式	1	著書紹介	18
平成20年度学位記授与式	6	外部資金受入状況、科研費採択状況	19
グローバルCOEプログラム		研究助成採択	21
タイの大学との部局間連携	9	受賞	22
ニュージーランドの大学、研究所を訪問して	11	教員人事、客員教授の紹介	22
国際交流		活躍する卒業生・修了生	23
ベトナム・フ工大学科学大学部との学術交流	12	平成21年3月卒業・修了者の就職状況	26
本学初のアフリカ・スタディ・ツアーオーを実施	13	はばたき基金からのお知らせ	26
パリ高等師範学校で客員教授	15	図書館だより	27
フィリピン大学留学体験記	16	開学記念行事開催！	29
モスクワから短期交換留学生が来学	17	「文化の丘づくり事業推進に関する協定」を締結	31
日本イスパニア学会が開催されます	17		

平成21年度

静岡県立大学学部・短期大学部・大学院入学式

4月8日、静岡市駿河区池田のグランシップ大ホールにおいて、静岡県立大学学部・短期大学部及び大学院合同の入学式が行われました。式典には、石川嘉延県知事（当時）、天野一県議会議長（当時）をはじめ、多数の御来賓に出席していただき、学部・

短期大学部及び大学院を合わせて1,033名の新入生及び保護者の方々を前に木苗直秀学長が入学式式辞を、静岡県公立大学法人を代表し鈴木雅近理事長があいさつを述べました。また、新入生を代表して、看護学部の長坂愛里さんが誓いのことばを述べました。



入 学 式 式 辞

静岡県立大学 学長 木苗 直秀

靈峰富士のふもと、桜の花が今や盛りと咲きほこるこの良き日に本学に入学された新入生の皆さん、「御入学おめでとう。」

本日、ここに平成21年度入学式を挙行するにあたり、静岡県立大学を代表して、皆さんのご入学を心から歓迎いたします。本年度は、学部566名、短期大学部240名、大学院修士課程195名、博士課程32名の計1,033名が入学されました。その中には中国、韓国、ベトナムなど7カ国からの留学生35名も含まれています。これらの多様な経験と国籍、年齢の学生諸君が、この静岡県立大学に自らを磨き高め、地域社会に貢献し、国際社会に勇飛する大きな夢や希望を抱いて集われたものと教職員一同大変喜んでおります。

また、これまで御子弟を見守ってこられたご家族のお喜びもひとしおのことと心からお祝いを申し上げますとともに、本日ご列席賜りましたことに改めて感謝申し上げます。また、この佳き日のために、ご多用中にも関わ



らうご臨席を賜わりました石川嘉延静岡県知事、天野一静岡県議会議長をはじめ、御来賓の皆様に厚く御礼申し上げます。



本学は、1987年に静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学を改組統合し、静岡県立大学として開学して以来、23年目を迎えております。静岡県立大学としては歴史的におまだ若い大学といえますが、薬学部は大正5年に創立された静岡女子薬学校を母体としており、90余年の歴史を誇っております。現在、静岡市内の谷田キャンパスに薬学部、食品栄養科学部、国際関係学部、経営情報学部、看護学部の5学部と、それぞれの大学院および環境科学研究所が設置され、また小鹿キャンパスには看護学科、歯科衛生学科、社会福祉学科からなる短期大学部が設置されております。大学は、学術研究を通して知を創造し、研究者を育成して知を継承し、地域と共に知を活用する場であります。

さて、新入生の皆さん、本学学生となった今日からあなた方もこの大学の一員として、このような知の創造と継承、活用の一端を担っていく必要があります。将来、責任ある社会人として静岡県立大学出身者として活躍していくための学習、研究活動を行っていく上で極めて大切な時を過ごすことになります。自分自身を冷静に分析し、見つめ、日々のたゆまぬ勉学を通して世界に通じるゆるぎない知識と技術を身につけること、すなわち生きるための「真の力」を養うことが重要です。

学部や短期大学部に入学された皆さんには、すべての生活が高校時代とは一変します。自分のことは自分で考え、自分で決めていかなければなりません。そのためには、自ら課題を求め、自ら学ぶ意欲を持つこと、すなわちチャレンジすることが大切です。時には失敗することもあるでしょう。その場合には、原因の追求と再チャレンジのため、友人や教員に相談すること、大学には、私をはじめ多くの教員と先

輩たちがいることを常に頭の片すみに置いていてください。また、大学院に入学された皆さんには、大学時代に培った教養と専門性をさらに高め、その道を極めようとする姿勢を持つことを望んでおります。

本学には5つの学部にそれぞれの大学院が併設されております。自分の専門分野を学ぶことはもちろんですが、国際的な視野を持ち、他の大学院などの幅広い交流を通じ、自分自身をより大きく成長させることに努めてください。

大学は、若い学生の学び舎であります。近年、聴講生や単位取得を目的とした科目等履修生など毎年200名以上の社会人の方が現役の学生とともに学んでおります。

ここで、本学をとりましております教育課題や取り組みをトピックス的にいくつか御紹介します。

平成18年度に薬学部が6年制教育に移行したのに伴い、実験・実習のための施設・設備の拡充工事が進められております。

また、本学は以前より語学教育に力を入れておきましたが、このたび言語コミュニケーション研究センターに、英語を母国語とする6名の特任教員を採用しました。各学部の英語の授業を担当するとともに、それ以外の時間帯にも、皆さんが生きた英語を常に学べる機会を増やすことができるものと期待しています。



式典終了後のクラブ紹介（ジャズダンス部）

教育、研究面では、平成14年度に文部科学省より国際的に通用する学術拠点として21世紀COE（Center of excellence）プログラムに、さらにその継続版として平成19年度にグローバルCOEプログラムに採択されました。「薬食同源」「食薬融合」を共通認識として、「薬と食品の相互作用の解明」「食品の新たな機能性の解明」などを研究しており、既にいくつかの成果が出ております。また同じく、平成14年度に文部科学省で採択された都市エリヤ産学官連携事業では、静岡県、静岡市、焼津市、地元企業20数社とともに、お茶、みかん、わさびを含む

地場産品を活用して新たな機能性食品素材の開発に取り組み、現代病と言われるストレスに対応するためのバイオマーカーの探索や抗ストレス食品の開発を進めております。平成20年度からは文部科学省の地域結集型事業に採択され、「静岡発・世界を結ぶ茶飲料とその素材の開発」をテーマとして本学を中心とした産学官連携事業が進んでいます。



短期大学部では、平成19年度に文部科学省で採択された「学び直し事業」H P S (Hospital play specialist) プログラムを通して、先駆的に子供医療における新たな職能人の育成を進めて2年が経過しました。この事業の今後の成果が期待されています。

なお、私は、本年3月に学長を拝命致しました。静岡薬科大学の出身ですので、皆さんの先輩に当たるわけです。常に物事を前向きに思考するように努力しておりますし、「信頼と感謝」が好きな言葉です。相手との信頼関係、絆を強く保ちつつ行動し、

常に感謝する気持ちを持つことを信条としています。この度、自分なりのキャッチフレーズを考えてみました。皆さんと共にこのキャッチフレーズを心に大學づくりを進めたいと考えています。「個を拓(みが)き、強い絆で知を発信」というものです。英語では“Developing the individual, strengthening bonds, and transmitting knowledge” 学生、教職員の一人ひとりが個人として個性ある自分をみがいて高めること、そして学部や研究科で、教室や研究室で、さらにクラブやサークルで、切磋琢磨しつつ仲間を作り、強い絆を形成し、結果として総合大学としての利点を活かし、知的成果を国内外にあまねく発信したいと考えております。



結びに、本日入学された皆さんには、学生時代に何事にも積極的に挑戦すること、そしてその中で自分を高め、将来の自分の道を探し求めて頂けることを期待して私の式辞と致します。本日は誠におめでとうございます。

理事長あいさつ

平成21年度 静岡県立大学 学部・短期大学部・大学院の入学式にあたり、静岡県公立大学法人を代表して一言お祝いを申し上げます。

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。皆さんを様々な面で支援し、温かい愛情をもって支えてこられた御家族の皆様にも、心からお祝いを申し上げます。

また、本日は、石川嘉延 静岡県知事、天野一 静岡県議会議長をはじめ、多くの御来賓の皆様に御出席をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

静岡県立大学は、静岡県公立大学法人が設置運営する大学として平成19年4月から新たにスタートし、法人の設立団体であります静岡県からの支援もいた

静岡県公立大学法人 理事長 鈴木 雅近



だきながら、公立大学として教育・研究活動を展開しています。

この法人化は、大学において充実した教育・研究、地域貢献活動などを実施していくために導入したものであり、この2年間、法人化のメリットを活かし、着実に成果を上げつつあると考えております。

今日、世界は、人や資源、情報の交流など、経済社会活動におけるグローバル化が急速に進んでおり、本県においても、6月には富士山静岡空港が開港し、本県と世界との交流はこれまで以上に活発になろうとしています。

こうした中で、県立大学は、大学の教育研究の水準を高め、国際的な学術拠点となることを一つの目標としており、平成19年には、国内でトップクラスの学術教育拠点として、文部科学省のグローバルCOEプログラムに採択され、活発な教育研究活動を展開しております。

また、国際共通語である英語能力の向上を目指して設置した言語コミュニケーション研究センターにおいて、今年度は教員スタッフを充実し、言語学習の環境整備を図っているほか、短期大学部におきましても、海外と連携し、遊びを通じて病気の子供を支援する専門家の養成プログラムを、全国に先駆けて実施するなど、国際的な取組を積極的に進めております。

さらに、学生の皆さんの就職支援を含むキャリア

形成を支援していくために、キャリア支援センターを設置するなど、皆さんの学生活動をきめ細かくサポートしているところであります。

このように、静岡県立大学は、時代の潮流に対応しつつ、新入生の皆さんの学習意欲に応える施設・設備と教育研究体制を備え、先進的な取組を行っており、法人としては、皆さん方の学習環境の充実にさらに努めてまいりたいと考えております。

入学した皆さんには、このような環境の中で、学業に励み、専門的な知識や高度な技術を習得していくとともに、思いやりの心のある豊かな人間性と、幅広い教養、グローバルな視点で考える姿勢を身につけていただくよう期待しております。

また、ゼミやサークル活動に参加することで、新たな学びの場を見出し、生涯の友人を得ることもあります。自らの主体的な選択で、これからキャンパスライフを充実したものにしていただきたいと思います。

静岡県立大学は、これまで多くの卒業生を社会に送り出し、各方面から高い評価を受けています。

本日入学される皆さんには、静岡県立大学の良き伝統を引き継ぎながら、皆さんの力で伝統の輝きを一層増すようにしてくださることを期待しております。

結びに、皆さんの大いなる健闘と御列席の皆様の御健勝を祈念申し上げまして、挨拶といたします。

誓いの言葉

春の光が暖かく感じられる今日のこの良き日に、私たちは憧れの静岡県立大学に入学することができました。本日は、私たち新入生のために、このような盛大な式を執り行っていただき、誠にありがとうございます。

また、ただ今は、鈴木理事長、木苗学長先生、石川静岡県知事、天野県議会議長から温かく、心強い激励とお祝いのお言葉をいただき、新入生一同大変感激しております。今日の新たな気持ちを忘れず、静岡県立大学生としての自覚と高い志を常に持ち、日々勉学に励みたいと思います。

私は中学生の時に、身内が病で入院し手術するということを経験しました。その際に、私は看護師の仕事の重要さを痛感しました。苦しむ患者に誰よりも長く接し、身体的な面だけでなく心理的な面や社会的な面にも気を配り、そして患者の家族である私

新入生代表 看護学部1年 長坂 愛里

達にも温かいことばをかけてくれた看護師さん。患者にとって、看護師とは、自分の一番身近なところでケアをしてくれる大きな存在なのではないかと感じました。この経験から、私は看護師になりたいと強く思うようになったのです。



医療が高度化し、少子高齢化社会である今、医療

の専門職としての看護師には、知識、技能、また実践力が求められていると思います。そして、人々は常に人からの思いやり、やさしさ、愛を求めています。だからこそ私は、この静岡県立大学の看護学部で、医療と看護に必要な知識と技術を身につけ、病む人の立場に立って、患者の皆さんができるだけの気持ちでいるのか、どんなケアを必要としているのかを適切に判断し、実行できる看護師を目指していきたいと思います。そのためにも、これから出逢うさまざまな人たちの考え方、意見、アドバイスを聞き、自分の視野を広げていきたいと思います。

私は中学生の時から『静岡県立大学に行きたい。そして看護師になりたい。』という志を持ちながら、これまで勉強してきました。そして今日、この式に

出席していることを本当に嬉しく思います。

本日、入学を許可されました1,033名は、志す分野は学部によりそれぞれ違いますが、これから社会の担い手となるため、日々自己研鑽に励んでまいります。

私たちは、今日から新たな一步を踏み出します。大学生活を実りあるものにするため、常に積極性を持って様々なことに挑戦し、多くの人々との出会いを大切にしていきたいと思います。そして将来、社会に貢献できる人に成長したいと思います。

そのためにも、木苗学長先生をはじめ、諸先生方、諸先輩方の温かいアドバイス、厳しいご指導をお願いいたしますと共に、今日の決意を忘れず、日々精進して参りますことをここに誓います。

平成20年度

静岡県立大学学部・短期大学部・大学院学位記授与式

3月24日、静岡市駿河区池田のグランシップ・大ホール・海において、静岡県立大学の学部・短期大学部・大学院学位記授与式が行われました。式典には、石川嘉延県知事（当時）、込山正秀県議会副議

長（当時）をはじめ、多数の御来賓に出席していただき、学部・短期大学部及び大学院を合わせて926名の卒業生及び保護者の方々を前に木苗直秀学長が式辞を述べました。



卒業式・学位記授与式式辞

静岡県立大学 学長 木苗 直秀



本日ここに学位記授与式を迎えた学部卒業生526名、短期大学部卒業生216名、大学院修士課程および博士課程修了生184名、計926名の皆さんに対し、大学を代表して心から「おめでとう」と御祝いの言葉を申し上げます。また皆さんの勉学を精神的、経済的に支えて下さいました御両親様、御家族様はじめ、厳しくも温かな御指導を頂きました本学教職員の皆様には心から厚く御礼申し上げます。さらに本日は、御多忙の中を御臨席賜りました静岡県知事・石川嘉延様、静岡県議会副議長・込山正秀様をはじめ御来賓の皆様方に深く感謝申し上げます。卒業生、修了生の諸君には多くの方々に支えられて今日のこの良き日を迎えることができたことに改めて感謝の気持ちを素直に表して頂きたいと思います。

さて、本学は、1987年に旧県立3大学が統合改組され、静岡県立大学として開学して以来、22年が経過しようとしています。このことは本日、学部を卒

業される多くの学生諸君が誕生された年に本学の歴史が始まり、一昨年にはともに成人式を迎え、さらに公立大学法人となって2年が経とうとしています。この間に5学部、5大学院研究科とともに短期大学部、環境科学研究所が併設され、現在、谷田と小鹿の地でおよそ3,400名の学生と400名の教職員が日夜勉学に研究に、情熱を燃やす環境が整備されてきました。

薬学部は、平成18年に6年制に移行しましたので、本年は4年制における最後の卒業生を送り出すことになりました。



この間、平成14年度に文部科学省で採択された21世紀COE (Center of excellence) プログラムでは、国際的に通用する教育研究機関として薬学研究科と生活健康科学研究科が新しい研究分野である「健康長寿科学」の確立をめざし、その成果は平成19年度にグローバルCOEプログラムに受け継がれ、大学院生に対して国際人になるための若手研究者育成事業を展開しています。この中にも何名かの学生諸君が米国オハイオ州立大学等で研修され成長したものだと思います。時を同じく平成14年度に文部科学省で採択された都市エリア事業では、静岡県、静岡市、焼津市や静岡大学、東海大学とともに県内数十社が6年間にわたり産学官連携事業を進めてきました。本県の地場産品である緑茶、わさび、みかんを含む食品成分の抗ストレス効果を活用して新たな食品素材の開発が行なわれました。その成果は本年採択された地域結集型事業「静岡発・世界を結ぶ緑茶を用いた新世代茶飲料の開発」に受け継がれています。本年6月に予定されている富士山静岡空港の開港が、これら事業の推進力になるものと期待してい





ます。

本学は小規模ながら、このように着実に歩を進めており、教育研究のみならず、社会貢献や国際交流においても学外から高い評価を頂くことができるようになりました。

ところで、昨年来、各国が100年に一度と言われる世界的金融危機に直面し、経済不況をもたらし、その結果、雇用問題を含めて多くの企業の経営破たんにより国民生活は厳しいものとなっております。さらに地球の温暖化など深刻な環境問題、エネルギーと食料の恒久的な確保、またいくつかの国で起きているテロ事件、国際貿易の中での食の安全性の問題、インフルエンザの世界的流行の可能性など、日本だけでは解決できない多くの問題が発生しております。

大学は知の拠点として、自然科学、人文科学、社会科学等の英知を結集して、これら諸問題の解決に貢献することが求められています。それ故、私達はそれぞれの専門分野で、また連携してそれらに対処する必要があります。



米国で本年1月に就任された第44代大統領のオバマ氏は、就任演説の中で、不況を脱するためには「希望と美德を携えて勇敢に立ち上がり、氷のように冷たい川を渡り、どんな嵐も耐え忍ぼう。」と国民に呼びかけ、そうすれば「きっと大きな贈り物を授かる時が来るであろう。」と語っています。



私は、本年3月10日に本学学長を拝命いたしました。開学以来、5人目となります。本学出身者としては初めての学長です。このような時代だからこそ、「勇気をもって前に進もう」「実行に移そう」と皆さんに呼びかけたいですね。そうすれば、近い将来必ず新しい光が見えてくると確信しています。



本日学位記を授与された学生諸君の中には、学生生活を終えて実社会に巣立っていく人、さらに進学して専門領域を極めようとする人、海外に活躍の場を求める人など進むべき道は異なりますが、それぞれに夢と希望をもって、本学の校章の如く大空にはばたいていかれることを希望します。私は「個を拓き、強い絆で知を発信」とキャッチフレーズを考えました。先ず、個人を拓くことはもちろん大切です。そして集団としての秩序を保ちつつ結集して、成果



モンゴルからの留学生

や情報を国内外へ発信することが極めて重要です。人とのふれあいを大切にしつつ、静岡県立大学の卒業生であることを誇りにして、それぞれの道を歩んでください。

結びに当たり、本日、学位記を授与された皆様の益々の御発展・御活躍を祈念し、また本学のこれから歴史作りに積極的に貢献して頂けますようお願い申し上げ、お祝いの挨拶とさせて頂きます。



グローバルCOEプログラム

タイ国チュラロンコーン大学およびマヒドン大学との部局間連携 大学院生活健康科学研究科／食品栄養科学部



教授／研究科長 小林裕和、教授／専攻長 横越英彦、教授 坂口眞人
 食品栄養科学部 教授／学部長 中山 勉 薬学部／薬学研究科 教授 野口博司
 事務局COEスタッフ 野島百合子

2月22日(日)、気温1°Cの余寒の静岡を後にして、中部国際空港セントレア経由で降り立ったバンコクは、34°Cの猛暑で、多湿のため肌がねっとりしてきた。同行した6名のうち4名はタイ国は初めてであり、時差はほとんどないものの、この寒暖の差は身にしみた。食事なども気になっていたが、バンコクで目にした総ては東京と変わらず近代化されており、何の心配もいらなかった。食べ物もおいしく、2日後の帰国時には、皆、体重が増えているように感じた。

今回の訪問の目的は、一義的には、チュラロンコーン大学 (Chulalongkorn University) 薬学部との学術交流の締結であり、本学グローバルCOEプログラムの一環として訪問した。既に締結が完了している本学薬学部の野口教授が今回の水先案内役となつた。チュラロンコーン大学は、24あるタイ国の国立大学の中でも格式および入学難易度が最も高い最古の大学である。所属する研究者、研究設備ともに国内随一を誇っており、国策に基づく研究活動が活発である。Wanchai De-Eknamkul准教授が、事前に訪問先を調整してくれていた。2月23日(月)午前中に、薬学部において、Pornpen Pramyothin学部長、Sarinee Krittianunt副学部長を含み、計10

名が参加の下、お互いの部局と各自の研究、また本COEプログラムと今回の訪問の意図等をパワーポイントを用いて説明した。その後、Pramyothin学部長、中山学部長、小林研究科長とが協定書に調印した。協定の内容は、(1)教員、研究者および学生の交流、(2)共同研究およびシンポジウムの提携、(3)相互に関心のある研究分野の情報・文献および研究資料の交換である。

この機会を活用し、チュラロンコーン大学の他部局との連携を推進すべく、環境科学研究所 (Institute of Environmental Research) を訪問し、Thavivongse Sriburi所長との意見交換および研究所内を視察した。当研究所は、タイ国の環境行政の一環として重要な機能を担っており、河川水等の分析が行われていた。バイオテクノロジー遺伝子工学研究所 (Institute of Biotechnology and Genetic Engineering) では、Amorn Petsom所長他3名と面談し、お互いの研究について議論した。そのうち複数名は、日本への留学経験があり、タイ国では、欧米および日本において博士学位を取得することがその後の研究者人生に有用なようである。さらに、理学部を訪問した。ここでは、Supot Hannongbua学部長他、各学科の代表者を中心に12名との会合の場が用意されていた。本COEプログラムのことを驚くほどよく調査しており、会合にはこちらの意図に沿った陣容を揃えていた。Hannongbua学部長より学部全体の説明を聞いた後、パワーポイントを使って本訪問の意図を説明すると共に、それぞれの研究内容を紹介した。この場で、本プログラムが企画するCOEセミナーへの参加に対して合意を得た。さらに、学部内を視察し、各学科の設備等を見学した。タイ国の理学部は、日本のそれと異なり、自然科学全般を包括する応用研究に力点が置かれている。とりわけ、食品テクノロジー学科 (Department of Food Technology) の分析機器は、最新鋭であり、タイ国内の食品成分基準等の制定のための分析が行



チュラロンコーン大学薬学部における学術交流協定調印式
中央がPornpen Pramyothin 薬学部長



チュラロンコーン大学バイオテクノロジー遺伝子工学研究所
中央がAmorn Petsom所長、向かって左がWanchai De-Eknamkul准教授



チュラロンコーン大学理学部での研究打ち合せ

われていることを垣間見た。

2月24日(火)は、マヒドン大学 (Mahidol University) を訪問した。マヒドン大学は、タイ国の大学成績一覧では1位にランキングされており、アジアでも有数の名門である。小林研究科長が20年前に博士学位論文を指導したJarunya Narangajavana（現：マヒドン大学准教授）が、当日の訪問先の調整を済ませていた。まず、理学部において、Sasivimon Swangpol副学部長、Sittiwat Lertsiri副学部長を含み、13名との会合の場が用意されていた。その後、Skorn Mongkolsuk学部長が合流した。ビデオを用いた当学部の説明の後、各学科の代表者5名がそれぞれの研究内容について説明し、本訪問者もそれぞれの研究について紹介した。今後の本COE拠点との連携・交流に関して具体的な討論を行った。さらに、各学科を視察した。特に、当学部には、薬学科 (Department of Pharmacology) があり、本COEプログラムと共有する研究テーマが複数見いだされ、今後連携を強化すべき価値は高いと判断した。

午後は、環境自然科学部 (Faculty of Environment and Resource Studies) を訪問した。Sittipong Dilokwanich学部長他8名と会合した。ビデオを用

いた当学部の説明の後、本COE拠点の研究・教育について、パワーポイントを用いて概説し、各研究者が個々の研究内容について説明した。さらに、本COE拠点との連携について議論し、部局間協定の締結、共同研究、COEセミナーへの参加、学生の相互交流等の可能性について意見を交換した。また、学部内の会議室等の付帯施設を視察した。これらの規模は、タイ国における環境科学への期待の大きさ



マヒドン大学理学部での研究者会議

を物語っていた。別途、横越教授は、環境自然科学部に隣接する栄養学研究所 (Institute of Nutrition) を訪問し、Visith Chavasit所長他4名と会合した。この場で、各自の研究内容に関して討論し、さらに、研究所内を視察した。

いずれの部局でも部局長を中心に議論の場が用意されており、視察を含めて、事前の調整が完璧であった。さらに、タイ国の国民性は控えめで、これらの点において、日本人と気質を共有するように感じる。本訪問に対する先方部局の期待は大きく、本学としては、これを機会にタイ国からの留学生の受入を含め、積極的な連携を発展させたい。



マヒドン大学環境自然科学部
中央がSittipong Dilokwanich学部長

ニュージーランドの大学とPlant & Food研究所を訪問して

薬学部 教授 山田静雄、食品栄養科学部 教授 大島寛史

3月28日に関西空港を発ち、ニュージーランドのオークランド市に到着し、29日から31日にかけて、マッセイ大学の英語教育センターとRiddet研究所（パームストンノース市）、オークランド大学の英語教育センター、薬学部と理学部、国立Plant & Food研究所を訪問した。特に、オークランド市のPlant & Food研究所のMargot Skinner博士とは、昨年7月に本学を訪問して以来9ヶ月ぶりの再会であった。同博士は今秋に、日本学術振興会の招聘研究者として来学されるため、その打ち合わせなどを行った。

パームストンノース市はオークランド市の南方で、国内線で約1時間のフライトであった。マッセイ大学は元総理大臣のWilliam Ferguson Masseyにより1927年に開設された歴史のある国立の農業大学で、ニュージーランドでは農業分野の人材育成と研究の中心になっている。附属研究施設のRiddet研究所は、食品や農作物の機能性や育種などに関する研究所で、1896年にWilliam Riddet教授により創立され、現在は教員60名と博士課程大学院生40名を有している。各研究員から研究内容について説明を受け、共同研究の可能性について探ることができた。

オークランド大学は医学部、薬学部、理学部、看護学部や生物工学部を含む8学部からなる総合大学（約37,000人の学生を擁する）である。アジアからの留学生が多数在籍しており、国際色が豊かなことでもよく知られている。薬学部の薬剤師教育では4年間の学部教育後薬剤師免許を取得し、1年間の実務研修を経て薬剤師として就職するとのことで、現場での研修が重視されているようである。同大学では、英語教育センター長から英語教育内容や授業料、臨床薬理学准教授のJames W Paxton先生から研究内容について説明を受けた。特に、Paxton准教授は、医薬品の薬物動態に与える食品成分の影響について研究を開始しており、グローバルCOEプログラム研究に関係していることから今後密接に情報交換することで合意した。

31日の午後は、Plant & Food研究所のMargot Skinner博士を表敬した。この研究所は、7部門に分かれ、約700名の従業員（約半分は博士研究員）から成るニュージーランド最大の植物・食品の国立研究所である。特産物であるキウイフルーツなどの機能性や新種の育種研究などを精力的に行ってい

る。各研究施設を見学後に、5名の研究者から研究内容について詳細な説明を受けた。アカデミックな研究から実践的研究までを包含する広範な研究成果に感銘を受けるとともに、私たちの薬食研究に示唆を与える内容であった。その後、Skinner博士や各研究者と機能性食品の有効性などについて議論し、共同研究を進めることで合意した。特に、キウイフルーツなどの果物や野菜などの摂取による疾患の予防治療効果、薬物との相互作用について検証することとした。本共同研究はグローバルCOE研究の推進に寄与できるものと考えられる。Skinner博士夫妻に夕食にご招待いただき、親睦を深めることができた。

翌日（4月1日）早朝にオークランド市を発ち、帰国の途についた。短期間ではありましたが、ニュージーランドのマッセイ大学、オークランド大学、Plant & Food研究所を訪問し、Skinner博士などの多くの研究者と情報交換を行い、交流を深めることができましたのは大きな収穫であり、これを機に本学とニュージーランドとの交流の輪を広げたいと考えている。最後に、今回の訪問で大変御世話になりましたニュージーランド政府の五味渉様に深謝申し上げます。



マッセイ大学（パームストンノース）のRiddet研究所にて

International Exchange Programs

国際交流

ベトナム・国立フエ大学科学大学部との学術交流

環境科学研究所 教授 岩堀 恵祐

平成20年8月28日、環境科学研究所ではベトナム社会主義共和国・国立フエ大学科学大学部と学術交流協定を締結しました。この協定に基づき、研究所では3名の研究者を静岡に招聘し、学術交流セミナーの開催や静岡市役所・環境関連施設の視察を行いました。

《参加者》

- フエ大学科学大学部
Dean, Assoc. Prof. Dr. Nguyen Van Tan
(グエン バン タン)
- Head, Assoc. Prof. Dr. Nguyen Van Hop
(グエン バン ホップ)
- Senior Lecturer, Dr. Truong Quy Tung
(トロン クイ トン、大学院環境物質科学専攻修了生)
- 静岡県立大学環境科学研究所（大学院環境物質科学専攻）
岩堀恵祐（教授）、坂田昌弘（教授）、国包章一（教授）、小川浩（客員教授）、内藤博敬（助教）、関川貴寛（助教）、Nguyen Thi Thu Trang（グエン ティ トゥ チャン、大学院生（M2）、通訳）、本多俊一（本専攻修了生、環境省廃棄物・リサイクル対策部）

《学術交流セミナー》

平成21年3月27日(金) 9:00~12:30、環境科学研究所棟会議室でセミナーを開催した。テーマは“Water Pollution Control”である。発表者並びに演題は次の通りである。なお、セミナー終了時に、環境省廃棄物・リサイクル対策部より“し尿処理システム国際普及推進事業費（Japan's Challenge for the Environmental Sanitation）”に関する資料の配付・説明が行われた。

- Truong Quy Tung : Studies of Leachate Treatment in Hue College of Sciences
- Nguyen Van Hop : Application of Water Quality Index as a Tool for Water Quality

Management in Binh Trien Region (Central Vietnam)

- Takahiro Sekikawa : Domestic Wastewater Treatment in Japan
- Masahiro Sakata : Load of Phosphorus Released from Bottom Sediment in Lake Sanaru and its Reduction by Soil Covering

《静岡市役所並びに環境関連施設の視察》

平成21年3月26日(木)と27日(金)の午後、静岡市役所で福本副市長を表敬訪問するとともに、中島浄化センターと南沼上清掃工場、最終処分場を視察した。



左から福本副市長、岩堀教授、Assoc. Prof. Dr. Tan、Assoc. Prof. Dr. Hop、Dr. Tung



中島浄化センターの風力発電設備「風電君」を視察

本学初のアフリカ・スタディ・ツアーレポート

国際関係学部 准教授 湖中 真哉

2月8日から18日にかけて、静岡県立大学初となるアフリカを対象地としたスタディ・ツアーレポート（学外研修旅行）が実施され、国際関係学部の学生5名が参加しました。

今回のスタディ・ツアーレポートでは、東アフリカ・ケニア共和国の首都ナイロビ、ナクル、マララルなどを訪問しました。



ナイロビ国立博物館で館員の説明を聞く

ナイロビ国立博物館を訪問して、館員の丁寧な説明を受けながら、ケニアの自然と文化について概要を学びました。午後からは、ギギルにあるナイロビ国連事務所を訪問し、国連ジュニア・プログラム・オフィサーを務めるスウェーデン人のローラ・ケイハスさんにコンパウンド内部を案内してもらいました。また、カフェテリアで、ローラさんとアフリカにおける女性のエンパワーメントと教育をめぐって、ディスカッションを行いました。夜

は、国連UNICEFの職員として働いていらっしゃる横関祐見子さんご自宅におじゃまして、夕食をごちそうになりながら、国連でのお仕事についておうかがいしました。



テントの中でケニア国内避難民から話を聞く

ナイロビでは、到着後、今回お世話になる旅行会社道祖神のスタッフ三輪美枝さんとデーヴィッド・ワチラさんと会食し、旅行会社のお仕事についておうかがいしました。翌日は、ナ

イロビ国連事務所で記念撮影



ナイロビ国連事務所で記念撮影

翌日、ナイロビを発ち、マイマヒュー近郊のジカゼ入植地、ナクル近郊のハイブライイン避難民キャンプを訪問しました。ケニアでは2007年の12月に大統領選挙が

実施され、選挙結果をめぐって国内各地で暴動が発生しました。1ヵ月間で死者1,000人以上、国内避難民約30万人が発生する事態となりました。われわれが訪れた避難民キャンプでも、人々は、いまだなおテント生活を強いられていました。テントの中で避難民の方からその厳しい生活についてお話をうかがいました。参加学生は、厳しい生活に触れる一方で、人々の明るい笑顔や活力に圧倒されました。

翌日、ケニアの地方の生活を学ぶためにマララルに移動し、3泊しました。参加学生は、マララルの町の八百屋で野菜が再利用される仕組みなどを聞きました。食堂では、注文してもなかなか夕食が運ばれてこないので困りましたが、参加学生も食堂の厨房に入れてもらって、一緒にケニア料理に挑戦することができました。すると、厨房のなかでは、たったひとりの女性が手早く手間暇のかかる調理をこなしていることがわかり、時間がかかる理由を目のくった火吹きの使い方を教えてもらう当たりにして、参加学生も事情を理解し、納得していました。



サンブルの老婆から廃物資源利用でつ



シャボン玉を飛ばしてサンブルの子供達と交流

引率教員の調査地のキシマでは、サンブルの集落を訪問して、現地語が理解できない中、音楽を演奏したり、シャボン玉を飛ばしたりして、工夫してコミュニケーションをとることを試み、なんとか、子供達と仲良くなることができました。そして、サンブルの女性達に、ビーズ細工を教えてもらって、各自ブレスレットの自作に挑戦しました。参加学生は、「伝統が失われていくことは、必ずしも悪いことばかりではない」という住民の言葉に印象を受けていました。



ビーズ細工を教えてもらって、各自ブレスレットの自作に挑戦を十分楽しめることがわかりました。そこで、引率教員も参加学生も、豪華旅行でもバックパッカーの貧乏旅行でもない学生らしい自然な旅のありかたとはどのようなものだろうかと考えるようになりました。そこで、引率教員と参加学生が話し合い、アフリカの人々に学びながら学生らしい自然な旅をして、豪華な旅行との差額を、最も厳しい状況に置かれ、貧困に苦しんでいる人々の支援に充てるような、本学の学生にふさわしい旅のありかたを考えてみました。

これは、湖中ゼミの学生が2月1日に本学小講堂で実施した学生プロジェクトでインターの仲本千津さんに講演してもらったTABLE FOR TWOの仕組みにヒントを得て思いついた考えです。TABLE FOR TWOは、先進国の肥満を会社の社員食堂などにヘルシー・メニューを導入することで防止し、ヘルシー・メニュー1食につき20円を途上国の学校給食に贈与することで、途上国の飢餓解決に役立てるようとする試みで、本学の食堂への導入も現在検討されています。そこで、スタディ・ツアーや帰路では、ジカザとパイプラインに再度立ち寄り、トウモロコシの粉の配給食に飽きている国内避難民の子供達にパンを買って寄付することにしました。これは、学生らしい旅の考え方にして寄付するパンだということを、引率教員が通訳して伝えると、国内避難民の方々から感嘆の声が聞かれました。

また、このスタディ・ツアーハ通じて、参加学生は、アフリカの様々な側面について触れ、そして、それを他の人にも伝えたいと考えるようになりました。そこで、参加学生は、ケニアと日本の距離を縮めるプロジェクト(略称「チヂプロ」)を始めることになりました。現在、参加学生は、同じ学生をケニア国内避難民の子供達にパンを寄贈し感謝をうける

今回のスタディ・ツアーハでは、一般的な日本人観光客が宿泊する豪華ロッジや和風欧風の豪華料理は、学生にはむしろ不釣り合いで、視点を変えれば、安くてもケニアの料理や宿

おもな購読対象者として、今回のスタディ・ツアーハ報告し、ケニアと日本の距離を少しでも縮めることを目指すフリー・ペーパーを作成して配布することを検討しています。今年度の学園祭では、参加学生は、今回のスタディ・ツアーハの写真をパネル展示して、今回購入した民芸品を販売したり、紅茶を出したりして、もし、収益が得られれば、それを支援にあてる喫茶店「アフリカフェ」を出店することも計画中です。

今回の参加学生の感想を以下に記します。

国際関係学科4年(学年はいずれも現在)天野梓
格差の広がりの叫ばれるケニアで田舎、都会の両方に行くことが出来、とても有意義な研修旅行であったと思います。

国際関係学科4年磯野佳奈

フライト変更、夕飯が2時間近く出てこない…多くのトラブルに見舞われましたが、HAKUNA MATATA(問題なし)!! 豊かな自然と優しい人たちとの出会いにより、全てが良い思い出となりました。ぜひもう1度行きたいです。

国際関係学科4年勝田有紀

短い期間でしたがたくさん的人に出会い、様々なケニアの側面を肌で感じることができた旅でした。アフリカにさらに興味が湧き、良い面も悪い面も含め、もっとアフリカのことが知りたい、自分が感じたアフリカを他の人にも伝えたいと感じました。

国際関係学科4年倉田真衣

広大な大地に圧倒されっぱなしの10日間、ケニアの人々や自然と触れ合うなかで、良い部分も悪い部分も含め日本で勉強しても知りえないケニアをたくさん知ることが出来たと思います。とても貴重な体験となりました。

国際関係学科3年渡邊なつき

旅のすべてが貴重な体験でした。そのなかでも、国内避難民キャンプを訪問し、見聞きした現実は私にとって忘れられないです。私は今回の研修旅行に勢いで参加しましたが、実際に行ってみることはとても大事だと実感しました。



ケニア国内避難民の子供達にパンを寄贈し感謝をうける

パリ高等師範学校で客員教授

国際関係学部 准教授 剣持 久木

高等師範学校というと、年配の人は戦前の日本の高等教育機関を想像するかもしれない。パリにある高等師範学校 (Ecole Normale Supérieur) は、フランス革命期に誕生し、以来、フランスを代表する知識人を養成してきた教育機関であり、所在地から通称ユルム街 (rue d'Ulm) とも呼ばれている。サルトルやフーコーといった哲学者の母校として知られているが、19世紀の天才数学者ガロア以来の理系卒業生の層も厚く、フィールズ賞受賞者の大半はノルマリアンが占めている。おまけに、学生数は、文系理系併せて一学年200人に満たない少数精銳の教育機関である。フランスでは、バカラレアと呼ばれる高校卒業資格試験の合格者は無試験で入れる一般の大学とは別に、個別に入学試験を課すグランドゼコールと呼ばれる高等教育機関がある。県大が協定を結んでいるリール政治学院もその一つであるが、高等師範学校は、そのグランドゼコールのなかでも、国立行政学院 (ENA)、理工科学校 (Polytechnique) とならんで3大エリート養成機関の一つを構成している。

そのような研究機関から客員教授に招かれるというのは大変名誉なことであるが、もちろんこれには理由がある。筆者が大学院生時代にフランス政府給費留学生として留学した際に、幸運にも高等師範学校寄宿生という資格も同時に与えられていたが、当時の友人 (ソフィー・クーレ) が、数年前に母校の高等師範学校助教授として着任し、以来、留学時代以来10数年ぶりのユルム街との付き合いが復活していたからである。

宿舎はもちろん研究個室まで用意された今回の待遇は、一般にハード面の研究環境が劣悪とされるフランスにあっては、破格のものであった。せっかくの環境を存分に活かさなければ罰があたるところであるが、最初の一週間は、客員教授としての講義の準備に忙殺された。高等師範学校歴史学部で開講されている研究入門セミナー Atelier de Historien (歴史家の工房) の2回分であったが、一回目は、拙著『記憶の中のファシズム』(講談社メチエ、2008年) 執筆の際の史料発掘経験を、二回目は1930年代のファシズムをめぐる議論の日仏比較の試論を講じた。対象学生がいかに優秀なノルマリアンとはいえる日本史の知識は殆どないので、明治から昭和戦

前期までの日本近現代史の概説も併せておこなった。

今回一番の収穫は、クーレ女史のお膳立てで、筆者の現在の研究テーマである独仏共通歴史教科書についてのラウンドテーブルを開催することができたことであった。ノルマリアンの人脈の強みがいかんなく発揮され、高等師範学校／パリ政治学院 (Science-po) 共催行事として、独仏共通教科書執筆者ら関係者や研究者ら6人のパネラーが集まってくれた。あいにく当日 (3月11日) は、大学教員、研究者による大規模なデモの日と重なってしまったため、聴衆は少なかったが、それでも筆者の研究課題のためには有意義な意見交換をすることができた。ちなみに、高等師範学校では、毎週のように研究集会やシンポジウムが開かれているが、筆者の滞在中にも、関心が重なるものだけでも『戦後ドイツにおけるショアーナーの叙述』『戦争と文学』といったテーマの行事が開催されていた。

このように高等師範学校は、一研究機関の枠を越えた、独特の「研究空間」を構成している。歴史学部長のフランソワ・ムナン教授が帰国前日の3月26日に開いてくれたカクテルパーティーも良い思い出である。4週間の知的な体験を、今後の研究生活にどれだけ活かせるかは甚だ心もとないが、すくなくとも、お土産に頂いた (現在も面影を残す) 19世紀の高等師範学校全景のリトグラフだけは、私の研究室の壁にユルム街の香りを確実に伝えている。



高等師範学校の中庭



ムナン学部長、筆者、クーレ助教授

フィリピン大学留学体験記

国際関係学部国際言語文化学科（2009年3月卒業）岡本 珠美

マニラの雑踏と熱気に照らされたフィリピン留学初日の夜、出会ったばかりのインド人ルームメイトとともに、不安と期待で見上げた夜空は満天の星空だった。

フィリピン大学は首都マニラ、ケソンシティのはずれに広大な敷地と100年の歴史を持ち、フィリピンの伝統と長い間受け継がれた精神が感じられる大学です。私はこの大学構内にある留学生寮で生活しながら、半年間交換留学生として勉強させていただきました。

毎日の授業では講義だけでなくグループワークやディスカッション、またフィリピン音楽の授業では実際にフィリピンの伝統的な楽器を使ってコンサートを開いたり、オペラ鑑賞をしたり、時にはField tripとして山登りや海岸でのキャンプをし、夜は野外でお酒を片手に皆でダンスを踊ったりとても充実した時間を過ごすことができました。私が履修した授業では講義の90%以上がタガログ語で行われ、文献もタガログ語で書かれたものを使用するなどとても苦労した面もありましたが、その分クラスメートや友人との会話も弾み、現地の言語を習得することの重要性と難しさ、またそれ以上の楽しさや充実感を味わうことができたのではないかと思います。

そして大学での授業以外にも私は、週2回JFC (Japanese Filipino Children) を支援するNGOで、また3年前のフィリピン大学からの交換留学生Lyndielou Egnerさんの紹介で、自閉症の男の子に日本語を教えるなどの活動も行っていました。幸いにも私が教えていた子供たちは、自身の生活に何らかの障害を抱えながらも支援を受けて生活することが出来ていましたが、フィリピンには経済的理由で学校に行けない子供たち、障害を持っていることで排除されてしまうなどといった、支援なしには教育を受けられない、しかし支援の受けられない子供たちがたくさんいるのも現状であり、フィリピンで生活している中で私は、過酷な環境の中で生きるたくさんの子供たちとも出会いました。毎週日曜日には教会で行われるミサにも参加させていただいていましたが、そこに来る子供たちもまた貧しい生活を強いられておりました。彼らの生活環境からもフィリピン社会における大きな格差を実感させられましたが、同時に、彼らの笑顔には“生きる”という言

葉の意味を考えさせられた日々でもありました。

現在人々の生活は急激に発展し、世界にはグローバル化や近代化の中で取り残されていく人々が多いのが現実です。しかし彼らの笑顔に多くの人が感銘を受けるのは、独自の文化を保ち、時代の変化による波を受けながらも人間としての本質は失わず、一生懸命に生きている彼らの姿が本来の人間としての生きる姿を感じさせるからではないでしょうか。

私がフィリピンで出会った彼らの笑顔とたくさんの思い出は、あの日見上げた星空のように、今も私のすぐそばに広がっています。



大学のクラスメートと



教会で出会った子供たち（ダニエラ（左下）は生まれつき言葉を発することができません）

モスクワ国立国際関係大学から短期交換留学生が来学

本学と交流協定を締結しているモスクワ国立国際関係大学から2月18日にゾーリナ・ナタリヤさんとジャリーロフ・ムザファルさんの2名の短期交換留学生が来学しました。

ナタリヤさんは約1ヶ月、ムザファルさんは約50日間、静岡市内的一般家庭にホームステイをし、国際関係学部島田准教授の指導を受けながら、静岡での留学生活を送りました。

ナタリヤさんは、日本の政府開発援助（ODA）、特にインドネシアでのエネルギー開発に興味を持ち熱心に勉強していました。また、ホームステイ先で料理を作るなど楽しく過ごしたようです。

ムザファルさんは、中央アジアのウズベキスタンの出身で、現在モスクワ国立国際関係大学に留学中のところ、留学先からさらに本学に短期留学されました。日本の神道に興味を持ち、静岡市内の神社をたくさん訪れたようです。

2人とも、それぞれ3月中旬、4月初旬にモスクワに戻りましたが、静岡のことを気に入った様子で、いつかまた静岡に来たいと言っていました。



左から木苗学長、ムザファルさん、ナタリヤさん、国際関係学部の島田准教授

県大で「日本イスパニヤ学会」が開催されます

日本イスパニヤ学会の第55回大会が10月10日(土)、11日(日)の両日、静岡県立大学で開催されます。

本学会は、ローマ時代に現在のイベリア半島が「イスパニヤ」“HISPANIA”（「スペイン」“ESPAÑA”的語源）と呼ばれていたことにちなんで名付けられており、スペインのみならずスペイン語圏全体の言語、文学、文化、思想といった人文科学研究にたずさわる者たちの集まりです。

1955年に創設され、現在正会員約400名を数えるスペイン語圏に関する日本最大かつもっとも歴史のある学会で、大会には200名を超える研究者たちが日本全国から参集します。両日とも新進気鋭の研究者が、スペイン語という言語、スペイン語圏の文学や文化、そしてスペイン語教育に関する発表を各分科会に分かれておこない、会員どうし熱い議論を展開する予定です。

国際関係学研究科広域ヨーロッパ研究センターの後援も受けておりますので、大学院生をはじめスペイン語やスペイン関係の授業を履修している学部学生、さらにスペイン語圏に興味のある方はぜひ国際関係学部棟1階の各会場に足を運んでみてください。

なお大会プログラムの詳細は9月頃、日本イスパニヤ学会HP (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajh/index.html>) ならびに本大会委員長大楠のHP (<http://www7b.biglobe.ne.jp/~ogusu/>) にアップされる予定ですので、そちらでご参照下さい。

問い合わせ先：大楠栄三（国際関係学部 准教授）TEL: 054-264-5261、E-mail: oogusu@u-shizuoka-ken.ac.jp



マドリード・スペイン広場のドン・キホーテとサンチョ・パンサ像

●教員の著書紹介●

『野蛮から秩序へ——インディアス問題とサラマンカ学派』

名古屋大学出版会 全402頁 2009年4月28日刊行 5,000円（税別）

国際関係学部 講師 松森奈津子

本書は筆者にとって、スペインで公刊された *Civilización y barbarie*, Madrid, Biblioteca Nueva, 2005, 315 p. と、*Los asuntos de Indias y el pensamiento político moderno*, Madrid, Servicio de Publicaciones de la Universidad Complutense de Madrid, 2006, 456 p. に次ぐ、3冊目の単著になります。

舞台は大航海時代ただなかの16世紀前半期スペイン。コロンブスを介して出会ったインディアス、つまり「新世界」アメリカ大陸との間のあるべき関係をめぐる諸議論を主な考察対象としています。上記スペイン語の著作では、その全体像を、レコンキスタ、主権国家の誕生、ルネサンス、宗教改革等と関連づけて明らかにする（後者）とともに、主として近代政治秩序形成の「第二の側面」であるヨーロッパ—非ヨーロッパ間関係の成立過程における意義を考察しました（前者）。それらをふまえ、本書は、とりわけインディアス問題で重要な役割を担ったサラマンカ学派——ビトリア、ソト、カノ、カラサンサなど——に焦点をあて、かれらが上記に加え、西欧主権国家体制の成立という、近代政治秩序形成の「第一の側面」にも注目すべき貢献をなしたことを示そうとしました。それは、主権国家論とは別のベクトルをもった「もう一つの国家論」を模索する有意義な試みだったと言えると思います。



「もう一つの国家論」の探究

『平田篤胤——靈魂のゆくえ』

講談社 全275頁 2009年1月29日刊行 1,500円（税別）

国際関係学部 講師 吉田 真樹

江戸時代後期の国学者平田篤胤（ひらたあつたね）について、約2年間考えてきたことを本にしました。実は、私は十数年前、学部の卒業論文で平田篤胤について書いたのですが、その頃は何もわからていませんでした。なぜかというと、篤胤を理解するためには、その師本居宣長の思想と江戸時代の思想風土としての仏教を知らねばならず、また宣長の思想を理解するためには、その根拠である『古事記』とその仮想敵であった儒学全般について知らねばならず、……というように、篤胤を正しく理解するためには日本の思想史全体についての把握が必要となってくるからです。卒論以来の「宿題」を、やっとこの本で果たすことができました。主な内容は、人が死後に靈魂として存在することを主張する篤胤の思想が、なぜ、どのように生まれてきたのかを辿るもので、読者としてゼミ生をイメージしながら書いたので、近代への影響関係を述べる終章では、わずかですが宮崎駿にも触れています。読売文化欄、朝日書評でもなぜかとりあげられました。お暇でしかたないときにでもお読みください。



人間の尊嚴を問うた
思考の粹!

『諭吉の流儀——「福翁自伝」を読む』

PHP研究所 全240頁 2009年5月刊行 1,300円（税別）

国際関係学部 助教 平山 洋

皆さん、福沢諭吉という人を知っていますか？ あらゆる日本人の顔のなかで、一万円札の肖像に使われている福沢の顔ほど、広く知られている顔はほかにはないでしょう。とはいえたが、福沢の生涯と思想がどのようなものであったかについては、十分に理解されてはいないのが実情です。この本の目的は、その、知られているようで実は知らない福沢諭吉の一生を、「福翁自伝」を読み解きつつたどることにあります。

そもそも『福翁自伝』ほど面白くてためになる本は、そうはないはずです。面白さについての説明は要りません。一方、ためになる、については、自伝の各所にちりばめられているために、あるいは見つけだしにくことがあるかもしれません。そうした『福翁自伝』の「ためになる」部分を拾い出し、解説を加えたところに、本書の意義を求めることができます。

本書の題名は、自伝中の一節、「私は私の流儀を守って生涯このまま変えずに終わることであろう」（「品行家風」の章「莫逆の友なし」の節）によっています。福沢諭吉が生涯変えずにいた流儀とはいったい何なのか、それはこの本の中で明かされることになります。



福翁自伝を読む
平山洋

諭吉の流儀

平山洋

諭吉の流儀

平山洋

諭吉の流儀

平山洋

諭吉の流儀

平山洋

外部資金受入状況

〈年度別受入状況〉

(単位：件、千円)

年度	奨学寄附金		受託研究		共同研究		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
平成12年度	16	118,100	0	0	0	0	16	118,100
平成13年度	74	122,410	21	79,107	4	5,719	99	207,236
平成14年度	82	88,389	25	64,532	10	86,700	117	239,621
平成15年度	143	96,364	21	52,055	7	65,200	171	213,619
平成16年度	130	103,465	27	96,296	12	61,200	169	260,961
平成17年度	115	119,351	37	256,801	17	29,550	169	405,702
平成18年度	108	126,329	28	250,451	20	44,500	156	421,280
平成19年度	104	117,795	56	322,203	23	54,477	183	494,475
平成20年度	119	151,492	39	233,091	31	65,767	189	450,350
計	891	1,043,695	254	1,354,536	124	413,113	1,268	2,811,344

〈平成20年度受入状況〉

(単位：件、千円)

年度	奨学寄附金		受託研究		共同研究		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
全学	11	33,553	0	0	0	0	11	33,553
薬学部	51	63,472	19	196,585	19	30,609	89	290,666
食品栄養科学部	29	24,520	10	23,979	6	27,800	45	76,299
国際関係学部	0	0	2	2,316	0	0	2	2,316
経営情報学部	5	6,347	3	3,216	1	1,108	9	10,671
看護学部	2	4,893	0	0	0	0	2	4,893
環境科学研究所	18	17,480	5	6,995	5	6,250	28	30,725
短期大学部	3	1,227	0	0	0	0	3	1,227
計	119	151,492	39	233,091	31	65,767	189	450,350

平成21年度 科学研究費補助金採択状況

【年度別 採択件数】

【平成21年度 部局別 採択件数】

【平成21年度 研究種目別 採択件数】

年度	新規課題		継続 課題	合計
	応募	採択		
13	171	28	34	62
14	193	35	40	75
15	189	36	46	82
16	152	26	52	78
17	165	42	40	82
18	209	39	49	88
19	189	44	50	94
20	194	47	63	110
21	178	47	59	106

短期大学部を含む

4月末時点

部局	新規課題		継続 課題	合計
	応募	採択		
薬学部	61	19	19	38
食品栄養科学部	35	8	8	16
国際関係学部	17	4	9	13
経営情報学部	15	4	5	9
看護学部	12	3	5	8
環境科学研究所	21	7	4	11
短期大学部	17	2	9	11
合計	178	47	59	106

研究種目	新規課題		継続 課題	合計
	応募	採択		
基盤研究（S）	0	0	0	0
基盤研究（A）	3	1	1	2
基盤研究（B）	23	7	9	16
基盤研究（C）	80	22	25	47
萌芽研究	23	1	2	3
若手研究（スタートアップ）			1	1
若手研究（S）			0	0
若手研究（A）	2	1	0	1
若手研究（B）	43	15	19	34
特定領域研究	4	0	2	2
合計	178	47	59	106

平成21年度に新規採択された研究代表者及び研究課題

基盤研究（A）（海外学術調査）

西田ひろ子 国際関係学部 教授 中国、ベトナム駐在日本人と現地従業員の間の対人コミュニケーション摩擦研究

基盤研究（B）

大島寛史	食品栄養科学部	教授	炎症部位におけるオゾン酸化コレステロールの生成機構の解明と生物活性、疾患への関与
谷晃	環境科学研究所	准教授	オゾンとCO ₂ が日本の主要樹木のテルペノイド放出に及ぼす影響
森山優	国際関係学部	講師	第二次世界大戦と日本の情報戦
津富宏	国際関係学部	准教授	犯罪者（特に、少年犯罪者）の社会復帰に関する理論的検討とアクションリサーチ
小山秀夫	経営情報学部	教授	利用者本位の介護サービスの提供に関する実証研究
赤井周司	薬学部	教授	酵素-金属複合触媒による革新的不斉合成法の開発
川島博人	薬学部	准教授	高内皮細静脈特異的遺伝子改变マウスを用いたリンパ球ホーミングの分子機構の解析

基盤研究（C）			
小原一男	薬学部	講師	骨格筋細胞における糖代謝制御におけるストレッチの効果とその分子機構の解明
太田敏郎	生活健康科学研究所	助教	腫瘍血管新生を抑制する食品成分の探索とその抑制機構の分子細胞生物学的解析
坂田昌弘	環境科学研究所	教授	ホウ素同位体比に基づく中国大陆からの石炭燃焼由来微量元素の越境汚染評価
伊吹裕子	環境科学研究所	准教授	近年の皮膚癌増加に対する化学物質と紫外線の複合影響の寄与—ヒストン修飾の観点から
大楠栄三	国際関係学部	准教授	小説の書き出しの研究：スペイン文学におけるトボス生成と変容過程の考察
西野勝明	経営情報学部	教授	公共分野における経営システムの浸透度の実証的把握に関する研究
西田公昭	看護学部	准教授	マインド・コントロールの影響と消費者契約および集団参加の検討
鈴木由美子	薬学部	助教	重要合成中間体の実用的合成法確立を目指した有機触媒開発研究
牧野正和	環境科学研究所	准教授	PCB置換位置異性体に関する化学熱力学量の悉皆的調査および分子構造との相関
左一八	薬学部	准教授	糖鎖機能制御プローブによるウイルス受容体機能の解明と感染制御
玉野春南	薬学部	研究員	微量金属に着目したストレス性神経障害のメカニズムとその予防
中山勉	食品栄養科学部	教授	茶カテキン類と生体成分の分子間相互作用に関する化学生物学的解明
坂口眞人	環境科学研究所	教授	木質系セルロースのナノ粒子化による高機能化および新規複合材料の創製
石川吉伸	薬学部	准教授	静電相互作用モデルに基づくテロメア四重鎖DNA結合性ポルフィリンの創製と解析
三輪匡男	薬学部	名誉教授	サイクリン依存性キナーゼによる肝薬物代謝酵素活性制御機構の解明
内田信也	薬学部	講師	医薬品・健康食品相互作用の臨床的インパクト解明を目指したプロスペクティブ臨床試験
桑原厚和	環境科学研究所	教授	消化管に発現する化学物質受容細胞を介する粘膜上皮イオン輸送制御機構に関する研究
鈴木裕一	食品栄養科学部	教授	小腸ナトリウム依存性糖吸収におけるタイト結合の陽イオン選択性の意義
濱井妙子	看護学部	助教	外国人患者と医療者間ににおけるコミュニケーション・ギャップの実証的研究
森本達也	薬学部	教授	心不全発症における心筋p300/GATA4経路活性化メカニズムの解明
三富道子	短期大学部	准教授	イギリスの認知症ケアの職業資格と訓練効果に関する研究
川村邦彦	短期大学部	教授	高齢者等災害弱者への災害時における介護保障に関する調査・研究

挑戦的萌芽研究			
赤井周司			
赤井周司	薬学部	教授	フェノール性水酸基からフルオロ基への変換法の開発と応用
若手研究（A）			
三好規之			
三好規之	食品栄養科学部	助教	食品因子イソチオシアネートの生物化学的特徴を利用した機能性発現機構解析
若手研究（B）			
柳原啓之			
柳原啓之	環境科学研究所	助教	社会的ストレスに起因した肥満のプレバイオマーカー探索
井上広子	食品栄養科学部	助教	青年期の食生活・栄養状態を反映するバイオマーカーの探索と栄養教育プログラムの開発
森田洋行	薬学部	助教	III型ポリケタイド合成酵素のX線結晶構造解析を基盤とする触媒機能の制御
東野定律	経営情報学部	講師	介護保険施設における介護職員の労働環境改善に関する基礎的研究
岸昭雄	経営情報学部	助教	人口減少下における商業の郊外化と人口の都心回帰が社会厚生に与える影響の分析
河原崎泰昌	食品栄養科学部	准教授	逆プロトオミクス研究を可能にする基盤技術の開発研究
横山英志	薬学部	助教	脂質ラフト層在膜タンパク質の三次元構造とその膜小胞形成機構の解明
成川真隆	食品栄養科学部	助教	うま味の相乗効果応答発生メカニズムの解析
井川貴詞	薬学部	助教	ベンザインの位置制御法を基盤とする多置換多環式芳香族化合物合成法の開発
閔俊哲	薬学部	助教	超高齢化社会に向けて非侵襲的な臨床分析試料としての爪の有用性
南彰	薬学部	助教	海馬神經興奮に伴ったシアル酸分子種脱離のインビオ解析と記憶形成における役割の解明
黒羽子孝太	薬学部	助教	MHC拘束性克服可能リボソームワクチンを応用了した抗ペロ毒素分泌型IgAの開発
関本征史	薬学部	講師	発がん前駆物質の遺伝毒性発現における異物-薬物相互作用の研究
金子雪子	薬学部	助教	糖尿病薬物治療標的としての脛β細胞脂質シグナリング制御に関する基礎的研究
河内俊二	看護学部	助教	精神科医療における行動制限最小化に向けた看護集団の組織変革に関する研究

継続課題の研究代表者			
基盤研究（A）	六鹿茂夫（国際関係学研究科 教授）		
基盤研究（B）	剣持久木（国際関係学部 准教授）、雨谷敬史（環境科学研究所 准教授）、武田厚司（薬学部 准教授）、横越英彦（食品栄養科学部 教授）、鈴木直義（経営情報学部 教授）、阿部郁朗（薬学部 准教授）、奥直人（薬学部 教授）、今井康之（薬学部 教授）、湖中真哉（国際関係学部 准教授）		
基盤研究（C）	小林公子（食品栄養科学部 准教授）、末松俊明（経営情報学部 准教授）、小林みどり（経営情報学部 教授）、渡辺達夫（食品栄養科学部 教授）、岩崎邦彦（経営情報学部 教授）、岡本恵里（看護学部 非常勤講師）、増田修一（食品栄養科学部 准教授）、水野かほる（国際関係学部 准教授）、吉村紀子（国際関係学部 教授）、岩堀惠祐（環境科学研究所 教授）、東達也（薬学部 准教授）、豊岡利正（薬学部 教授）、伊藤邦彦（薬学部 教授）、石川智久（薬学部 教授）、合田敏尚（食品栄養科学部 教授）、小寺栄子（看護学部 教授）、奥原秀盛（看護学部 准教授）、漁田俊子（短期大学部 教授）、増田明美（短期大学部 講師）、江原勝幸（短期大学部 准教授）、永野ひろ子（短期大学部 講師）、佐々木隆志（短期大学部 教授）、藤原愛子（短期大学部 教授）、白石葉子（短期大学部 講師）、松尾ひとみ（短期大学部 教授）		
挑戦的萌芽研究	谷晃（環境科学研究所 准教授）、松田正己（看護学部 教授）		
特定領域研究（公募）	奥直人（薬学部 教授）、川島博人（薬学部 准教授）		
若手研究（B）	脇本敏幸（薬学部 助教）、岩尾康範（薬学部 助教）、浅井知浩（薬学部 講師）、大川栄重（食品栄養科学部 助教）、新井英一（食品栄養科学部 准教授）、大浦健（環境科学研究所 助教）、吉田真樹（国際関係学部 講師）、伊藤一頼（国際関係学部 講師）、松森奈津子（国際関係学部 講師）、上野雄史（経営情報学部 助教）、伊藤創平（生活健康科学研究科 助教）、江木正浩（薬学部 講師）、清水広介（薬学部 助教）、尾上誠良（薬学部 講師）、林秀樹（薬学部 講師）、五十里彰（薬学部 准教授）、高橋忠伸（薬学部 助教）、寺内英真（看護学部 講師）、橋川裕之（国際関係学部 講師）		
若手研究（スタートアップ）	木林美由紀（短期大学部 講師）		

※ 4月1日転入者を含み、3月31日転出者、育児休業による留保者、採択結果が出ていない種目を除く

研究助成採択

平成21年度(財)発酵研究所研究助成（継続）

研究者：薬学部 教授 鈴木 隆

研究課題：インフルエンザウィルスによる糖鎖受容体認識の多様性と宿主域を規定する分子基盤の解明

平成21年度(財)喫煙科学研究財団研究助成（継続）

研究者：薬学部 教授 山田静雄

研究課題：排尿機能におけるニコチン性受容体の役割と創薬

平成21年度(財)上原記念生命科学財団研究助成

研究者：薬学部 講師 江木正浩

研究課題：リサイクル型カチオン性金触媒の開発と応用

平成21年度(財)日本科学協会笹川科学研究助成

研究者：薬学部 助教 南 彰

研究課題：*N*-グリコリルノイラミン酸による記憶学習時の糖鎖修飾のリアルタイム解析

平成21年度(財)蓬庵社研究助成

研究者：食品栄養科学部 教授 合田敏尚

研究課題：消化管における糖シグナル伝達を介した糖吸収の制御と末梢血白血球および内臓脂肪組織の遺伝子発現プロファイルとの関連

平成21年度(財)旗影会研究助成

研究者：研究代表者 食品栄養科学部 准教授 熊澤茂則

共同研究者 生活健康科学研究科 助教 太田敏郎

研究課題：鶏卵漿尿膜法(CAM法)を利用した血管新生抑制を有する食品成分の探索

平成21年度(財)蓬庵社研究助成（継続）

研究者：食品栄養科学部 助教 林 久由

研究課題：消化管の経細胞性クロライドイオン吸収機構

平成21年度(財)テクノエイド協会福祉用具研究開発助成（継続）

研究者：国際関係学部 教授 石川 准

研究課題：GPSによる視覚障害者高精度歩行支援システムの開発

平成21年度(財)ソルト・サイエンス研究財団研究助成（継続）

研究者：環境科学研究所 教授 桑原厚和

研究課題：腸管でのK⁺吸収・排泄機構とその制御

平成21年度(財)新技術開発財団（継続）

研究者：環境科学研究所 准教授 谷 晃

研究課題：ウバメガシのモノテルペン放出に関する種内変異の解明

平成21年度日本学術振興会特別研究員

研究者：薬学研究科博士後期課程3年 鰐淵清史（継続）

研究課題：植物ポリケタイド合成酵素の構造機能解析

研究者：薬学研究科博士後期課程3年 田代京子（継続）

研究課題：新規EGF受容体制御因子の機能解－創薬標的分子としての検証

研究者：生活健康科学研究科博士後期課程3年 ライ インリン（継続）

研究課題：糖尿病合併症の発症機構としての糖化最終産物によるNO生合成の異常制御

研究者：生活健康科学研究科博士後期課程3年 鈴木拓史（継続）

研究課題：小腸吸収細胞の分化および栄養素吸収にともなう遺伝子発現のエピジェネティック制御

研究者：薬学研究科博士後期課程3年 三坂真元

研究課題：緑茶と高脂血症治療薬の薬物動態学的および薬力学的相互作用の基礎および臨床研究

研究者：生活健康科学研究科博士後期課程3年 森 大気

研究課題：システィン残基の酸化修飾を介した食品因子による蛋白質機能制御機構の解析

研究者：生活健康科学研究科博士後期課程3年 植草義徳

研究課題：NMRを用いたカテキン類と生体成分との相互作用解析

受 賞

■第24回茶学術研究会講演会で学術奨励賞を受賞

2009年3月17日に静岡で開催された第24回茶学術研究会講演会で、薬学部生物薬品化学分野の海野けい子准教授が学術奨励賞を受賞しました。この賞は茶学術の更なる向上をめざし、本年より設けられたものです。「茶成分によるマウス脳機能低下抑制作用」という演題で、海野、佐々木（都老研）、高林（県大短）、山本、前田、石川、岸戸、井口、茶山（静大）、星野との共同研究の成果を発表しました。発表内容は、加齢により脳内で活性酸素の生成／除去のバランスが崩れるが、抗酸化作用を有する緑茶カテキンの摂取により脳機能低下を有意に抑制できたこと、また高脂肪食摂取により脳機能が低下したが、緑茶カテキン・カフェインの摂取により肥満だけでなく脳機能低下も改善できた、というものです。発表内容は中日新聞でも紹介されました。

同じく、大学院薬学研究科医薬品情報解析学講座修士2年の吉川俊博さんが、学術奨励賞を受賞しました。受賞対象となった発表は「茶カテキンの短期摂取が酸化ストレスマーカーへ及ぼす影響：健康成人を対象としたランダム化二重盲検比較試験」であり、その内容は、茶カテキンのヒトにおける酸化ストレスマーカーや脂質代謝に対する影響を、エビデンスレベルの最も高いランダム化二重盲検比較試験により検討したものです。本学の大学院生のヒトを対象とした茶研究が高く評価された受賞と言えます。



海野けい子准教授



吉川俊博さん

教員の人事、新規客員教授・准教授の紹介

■教員の人事

●採用	(4月1日付け)		ジム ヘンマン	語コミュニケーション研究センター	特任講師	尾崎 亨	国際関係学部	教授
眞鍋 敬	薬学部	教授	クリストファー・フィリップ・マテン	語コミュニケーション研究センター	特任講師	前坂 俊之	国際関係学部	教授
森本 達也	薬学部	教授	エリック・レンハート	語コミュニケーション研究センター	特任講師	橋本 伸哉	環境科学研究所	教授
宮寄 靖則	薬学部	准教授	ケント・ロイ・ローズ	語コミュニケーション研究センター	特任講師	加治 和彦	生活健康科学研究科	教授
栗木 清典	食品栄養科学部	准教授	(5月1日付け)		池田 潔	薬学部	准教授	
佐久間理英	食品栄養科学部	助教	瀧 優子	薬学部	助教	森本 俊明	薬学部	准教授
飯野 勝己	国際関係学部	准教授	●大学院兼務		板井 隆彦	食品栄養科学部	准教授	
ジョサン・ティーハン	国際関係学部	准教授	並木 徳之	薬学部	教授	齋藤 慎一	食品栄養科学部	准教授
橋川 裕之	国際関係学部	講師	●昇格	(4月1日付け)		白木まさ子	食品栄養科学部	准教授
高 瑞紅	経営情報学部	講師	増田 修一	食品栄養科学部	准教授	星野 昌裕	国際関係学部	准教授
長谷川喜代美	看護学部	准教授	関本 征史	薬学部	講師	奥野ひろみ	看護学部	准教授
鈴木 恵	看護学部	助教	●退職	(3月31日付け)		原田 均	薬学部	講師
ケビン・バナリオ	語コミュニケーション研究センター	特任講師	小野 孝彦	薬学部	教授	栗山 孝雄	食品栄養科学部	助教
江川テイン・ソラス	語コミュニケーション研究センター	特任講師	佐藤 雅之	薬学部	教授	堀江 信之	食品栄養科学部	助教

■新規客員教授・准教授の紹介

●教授			小野 孝彦	静岡県立大学薬学部 前教授	H21.4.1～H24.3.31
石毛 敦	慶應義塾大学医学部特別研究専任講師	H21.4.1～H24.3.31	佐藤 雅之	静岡県立大学薬学部 前教授	H21.4.1～H24.3.31
中川 良隆	中川内科医院院長	H21.4.1～H24.3.31	佐野 満昭	名古屋女子大学家政学部長	H21.4.1～H24.3.31
二宮 文乃	アオキクリニック医師	H21.4.1～H24.3.31	相原 慎一	理学博士	H21.4.1～H24.3.31
渡邊 裕司	浜松医科大学医学部臨床薬理学教授	H21.4.1～H24.3.31	池田 潔	広島国際大学薬学部教授	H21.5.1～H24.3.31
川上 純一	浜松医科大学附属病院薬剤部教授・薬剤部長	H21.4.1～H24.3.31	●准教授		
三輪 匠男	静岡県立大学名誉教授	H21.4.1～H24.3.31	加藤 善久	徳島文理大学薬学部准教授	H21.4.1～H24.3.31
川森 文彦	静岡県環境衛生科学研究所主幹	H21.4.1～H22.3.31	久米 一成	静岡県環境衛生科学研究所主幹	H21.4.1～H22.3.31
飯田 滋	自然科学研究機構基礎生物学研究所教授	H21.4.1～H24.3.31	矢野 友啓	独立行政法人国立健康・栄養研究所補完成分プロジェクトリーダー	H21.4.1～H22.3.31
米谷 民雄	国立医薬品食品衛生研究所名誉所員	H21.4.1～H24.3.31	立道 昌幸	昭和大学医学部衛生学教室准教授	H21.4.1～H22.3.31
中村 好志	楣山女学園大学生活科学部教授	H21.4.1～H24.3.31	鈴木 敬明	静岡県工業技術研究所主任研究員	H21.4.1～H22.3.31
磯崎 泰介	社会福祉法人聖隸福祉事業団聖隸浜松病院腎センター長	H21.4.1～H22.3.31	二村 悟	株式会社企画プロジェクト主任研究員	H21.4.1～H24.3.31
川北 博	公認会計士	H21.4.1～H23.3.31			

活躍する卒業生・修了生

今後が楽しみです！

2007年3月国際関係学部卒業

現・鈴与株式会社勤務（株式会社フジドリームエアラインズ出向）成岡 彩

私が鈴与株式会社に入社して早3年目。入社して最初の配属は関連会社への出向で、約2年間はそこで総務・経理を担当。当初は経理関連の資格もなく、わからないことばかりでしたが、2年の間に簿記資格を取得して経理知識も増え、効率のよいやり方で仕事をこなせるようになってきました。あっという間に月日は流れて、気がつけば3年目の今年…大きな変化が訪れました。人事異動です。

静岡にお住まいの方はよくご存知かと思いますが、6月4日にいよいよ富士山静岡空港が開港します。それに伴い、鈴与は航空会社を設立しました。“フジドリームエアラインズ（FDA）”です。真っ赤な機体の1号機をテレビや新聞でご覧いただいた方も多いのではないでしょうか？

この度、私はFDAに異動し経理担当となりました。これまで経理担当でしたが、新しい会社、それも航空会社となると今までとは勝手が違います。日々新しいことに直面し、その都度ルールを決めて対応するという具合で、毎日が慌しく過ぎていく今日この頃…しかし、新しい会社の立ち上げに関わるという経験はそうできるものではありません。しばらくはまだバタバタした日々が続きそうですが、貴重な経験ができるることを嬉しく思いますし、FDAの真っ赤な飛行機が静岡空港から飛び立つのを見る

日が楽しみでなりません。

まだまだ未熟者の私ですが、これまでに得た知識を活かし、FDAと共に成長していくたらと思います。

今夏7月23日、FDAは初就航を迎えます！

※フジドリームエアラインズのHPです。是非ご覧ください。

→ <http://www.fujidreamairlines.com/>

（この記事は、2009年4月に執筆されました。）



FDAの機体模型と筆者

人づくりに生かせる県大の学際的カリキュラム

1997年3月大学院国際関係学研究科修了

現・信州大学勤務

金子史彦

私は信州大学教育学部で准教授をしております。主に、中学校等の英語の教員免許を取る学生に英語と英米文学を教えています。教育とは人づくりであり、国家の根幹を担うものであると思います。ですから将来教育に携わるための人材を育成する今の仕事は大変大きな責任を伴うものであり、それ故のやりがいを感じています。

教師というものは専門性と多様性がともに求められると思います。自分の専門の教科の深い知識や教

授法に通じていないとなりませんが、それと同時に幅広い知識や物の見方も身につけ、偏りのないバランスの良さが必要なわけです。広く深く、あるいは専門を深く掘り下げるがしかしそれに特化し過ぎてはいけないという、ある意味理想論に聞こえるような資質が求められるのです。そういう優れた教師を育成するためには、我々教育学部の教師自身も当然そうでなくてはなりません。私は静岡県立大学大学院国際関係学研究科で学んだのですが、そこで学

んだことはそういったことに大いに役立っています。県大の大学院は、各学生の研究に直結する授業だけでなく、結構広い範囲の学問領域にまたがって授業を履修することが求められます。その当時はそういうカリキュラムの意図を完全に理解していたとは言い難いです。しかし、今こうして人づくりの基礎と

るべき仕事に携わるようになり、人づくりというものを考えるようになってみると、県大のカリキュラムがいかに考えられたものであるかというのがわかります。県大で学んだことは、我々が今目指している人づくりに大いに役立っております。

学生時代の関心事を大切に

大学と大学院を含め、計7年間在籍した県大を離れてから5年になる。現在は鳥取市役所で韓国担当の国際交流員として働いている。韓国との都市間交流に関する企画・調整や書簡の翻訳、通訳が主な業務だ。

大学時代に韓国に関心を持ち、大学、大学院と小針進先生の下で日韓関係について学んだ。そのため今の仕事は、学生時代の関心事と直結したものになる。韓国との交流を円滑に進めるには言葉のほか、社会の動きなど韓国の事情を踏まえた上での交渉や調整が必要になる。また、昨年の竹島問題以降交流が中断している韓国の姉妹都市との交流再開に向けた調整では、これまでの日韓交流の流れなどを把握するにあたり、学生時代のゼミや院の研究で取り組んだことを生かしている。

現職は今年4月に始まったばかりだ。鳥取には昨年10月、夫の仕事でやって来た。それまでは結婚を機に移り住んだソウルで、韓国のビジネス情報を日本企業に配信する会社の記者として約3年間、勤務。院修了後すぐは、出身地の大坂で韓国の自治体事務所に勤めた。短い職歴ではあるがずっと、学生時代から興味のあった日韓の橋渡しに関する仕事に携わっている。

それでもすぐにやりがいを見出せたわけではない。そもそも就職活動では力不足もあり、韓国一色の学生時代を指摘され、否定されたようで落ち込んだ。働きはじめてからは、学生時代に培った語学力や知

2004年3月大学院国際関係学研究科修了
現・鳥取市役所勤務 北村香葉子

識はビジネスの世界では通用しないように感じられ、自信をなくした。

だが、卒業後もボランティア活動などさまざまな形で学生時代の関心分野に関わる仲間に励まされ、仕事として携われることがありがたいと思うとともに、また一から韓国と向き合っていく覚悟ができた。「県大は朝鮮半島研究で有名なところ」と知られていることもプレッシャーではあるが、背中を押していただいている。いまは微力ながら日韓交流の一助となれていることがうれしい。

仕事に限らずとも、大学で取り組んだことはその後の生活も豊かにするとと思う。後輩のみなさんが県大で夢中になれる何かを見つけ、卒業後もそれを大切に育てていくよう応援している。



国際交流員の面々（最前列の右端が筆者）

研究者を目指して

※ このコーナーでは、研究者として国内外で活躍する卒業生・修了生を紹介します。

アメリカアナグマ（バジャー）の街での暮らし — ウィスコンシン州マジソン

2001年3月大学院生活健康科学研究科博士後期課程修了
現・ウィスコンシン州立大学医学部（米国）勤務 飯田麻里

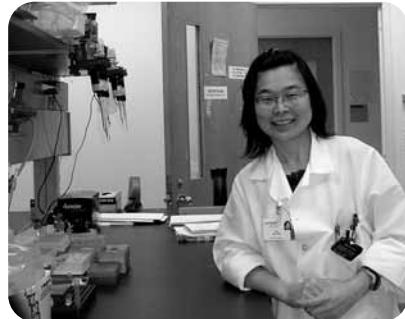
ウィスコンシン州と聞いて、地図上ではっきりと位置を示せる日本人の方は少ないと思います。私もこの地に来るまではウィスコンシン州がどのくらい北に位置し、どのくらい寒いのかも把握していませんでした。

私は静岡生まれの静岡育ち、静岡県立大学食品栄養科学部を平成5年に卒業し、静岡県内の企業に就職した後、勤めながら社会人学生として大学院生活健康科学研究科博士後期課程に在学しました。博士の学位取得後には、米国ノースカロライナ州の国立環境健康科学研究所（NIEHS）で博士研究員として働くチャンスを得、静岡の企業を休職して3年間働きました。静岡から離れて初めて暮らす地がまさかアメリカになるとは思っていませんでした。その後、日本へ帰国し2年間同じ企業で勤いた後、今度は結婚を期に、この北の地ウィスコンシン州マジソンにくることになったのです。温暖な気候の静岡とは異なり、冬は日中も氷点下のマジソン市ですが、湖に挟まれた美しい街としてアメリカ国内では有名です。ウィスコンシン大学は1849年に州都マジソンに創設され、全米最大規模の大学といわれています。タイトル中のアメリカアナグマ（バジャー）はウィスコンシン州を象徴する動物で、我が大学のマスコットでもあります。バスケットボール、アメリカンフットボール、アイスホッケーの試合になると老若男女揃ってバジャーマークの入った赤いトレーナーを着てチームを応援します。

私は現在医学部にて、がん患者への抗がん剤治療に関する基礎医学研究をしています。細胞やヌードマウスを用いて抗がん剤効果を調べる研究は昼食を取り間もない時もありますが、得られたデータを論文にまとめ、雑誌に採用された時は何とも言いがたい達成感があります。また、医学部に勤務している医師の方々と討論する機会も多々あります。最近では、「トランスレーショナルリサーチ」と呼ばれる基礎研究で見いだされた成果を臨床に応用する分野にも参画しています。この「トランスレーショナルリサーチ」は一人の研究者ではできることではなく、多くの専門家が集まって行われます。セミナーや会議に出席する度に一人一人の知識と努力が人々の健康の向上に役に立っていることを実感します。大学

院生活健康科学研究科で得た知識、「人の健康」に対する考え方、人との交流等、全てが今の私の研究生活に力を与えてくれています。静岡県立大学を卒業後、どのような路を選ぶかは皆さんが置かれた環境によって異なると思いますが、自分の選んだ道を進むための努力は惜しまないでください。しかし、その選んだ道を楽しんで進むようにしてください。今後も多くの方が様々な分野で活躍されることを

願います。



筆者、研究室にて



来年、研究室が入るWisconsin Institutes for Medical Research



ウィスコンシン大学のマスコット、アメリカアナグマのBucky

平成21年3月卒業・修了者の就職状況

キャリア支援センターでは、企業の採用活動の進行に合わせ、各種就職ガイダンスや講座を年間30回以上開催するとともに、専門のアドバイザーによる個別相談も実施するなど、きめ細かな就職支援を行っています。

平成21年3月卒業者の就職状況は、学部生は、内定率は98.4%で、前年同期を1.3ポイント上回っています。大学院を含めた大学全体では、内定率は97.7%、前年同期を0.1ポイント上回っており、昨年秋以降の景気悪化の影響が懸念されましたが、多くの学生は夏までに内定を得ていたこともあり、全国の平均（95.7%）や県内大学の平均（94.8%）と比べても高い数値となっています。なお、幸いにも、本学では、内定取消はありませんでした。

●平成21年3月卒業・修了者の就職状況（平成21年3月31日現在）

(単位：%)

	薬学部	食品栄養科学部	国際関係学部	経営情報学部	看護学部	学部計	大学院	合計
就職内定率	100	100	98.3	96.6	100	98.4	95.3	97.7
(前年度)	92.5	97.9	95.7	100	98.6	97.1	99.3	97.6

●平成21年3月卒業・修了者の主な就職先（平成21年3月31日現在）

薬 学 部 薬 学 研 究 科	アステラス製薬、エーザイ、大塚製薬、グラクソ・スミスクライン、第一三共、大正製薬、田辺三菱製薬、中外製薬、万有製薬、日本たばこ産業、花王、静岡県
食 品 栄 養 科 学 部 生 活 健 康 科 学 研 究 科	はごろもフーズ、フジパングループ本社、ミツカン、カネボウ化粧品、シャンソン化粧品、ポーラ化成工業、ツムラ、国立病院機構、静岡県立病院機構、東京都
国 际 関 係 学 部 国 际 関 係 学 研 究 科	静岡新聞社、凸版印刷、三菱重工業、東海旅客鉄道、日本航空インターナショナル、静岡銀行、日本生命、プリンスホテル、名古屋空港、静岡県、静岡市
経 営 情 報 学 部 経 営 情 報 学 研 究 科	浜松ホトニクス、TOKAI、静岡銀行、清水銀行、スルガ銀行、三菱東京UFJ銀行、損害保険ジャパン、NECソフト、カプコン、静岡県、静岡市
看 護 学 部 看 護 学 研 究 科	静岡県立病院機構、静岡赤十字病院、聖隸福祉事業団、東京大学医学部附属病院、日本赤十字社医療センター、名古屋大学医学部附属病院、静岡県、静岡市

「はばたき寄金」からのお知らせ

はばたき寄金運営委員会

1 平成20年度はばたき寄金事業実績

(1) 奨学金の授与

モスクワ国立国際関係大学短期交換留学生の派遣学生2名と受入学生2名に奨学支援金を授与しました。

(2) 第11回学生スピーチコンテストの開催及び第12回学生文芸コンクール並びに創造力啓発コンテストの実施

剣祭初日の11月1日に第11回学生スピーチコンテストを開催しました。また、第12回学生文芸コンクール及び創造力啓発コンテストの作品募集を行い（7月～10月）、剣祭初日の11月1日に入選者の表彰を行いました。

(3) はばたき賞の授与

平成20年度は該当者はありませんでした。

2 平成20年度はばたき寄金収支結果

○収入計	10,473,259円	
内訳	10,072,001円	前年度繰越金
	389,648円	寄附金等（教職員、後援会等）
	11,610円	雑収入（預貯金利息）
○支出計	807,123円	
内訳	704,000円	報奨等
	100,000円	事業費助成（開学記念行事）
	3,123円	雑費（賞状用紙代等）
○差引残高	9,666,136円	平成21年度に繰越し

図書館だより

附属図書館の現在と未来

本学附属図書館は書物だけでなく電子媒体の情報や映像資料などを所蔵し、学生や教員に多面的な情報を提供することを任務としています。また、毎年、爆発的に増加し続ける文献をひとつの大学図書館のみで収集することはもはや不可能であり、日本国内のみならず諸外国の図書館との提携が、現代では図書館運営の不可欠な要素になりつつあります。

身近なところでは、昨年4月からの新図書館情報管理システムの運用開始により、短期大学部図書館とのさらなる情報の共有化が実現し、インターネットや携帯電話で資料の取り寄せができるようになりました。また、国際的な規模ではグローバルILL（海外文献複写サービス）に加入し、教員を対象に、国内で入手できない文献を北米・韓国の大学図書館や大英図書館(The British Library)などに複写依頼し、取寄せるサービスを行っています。もちろん、海外のグローバルILL参加館から依頼があれば、本学所蔵資料を複写して海外に提供しています。本学の教育・研究水準を高めるためには、こうしたサービスを今後より一層充実させていかなければなりません。

また、利用者の視点に立って業務を改善する必要があります。これまでにも、OPACの機能を拡大して、オンラインでの貸出延長や貸出予約ができるようにしました。また、学生や教職員向けに相互貸借利用講習会や、文献・電子ジャーナル・データベースなどの情報検索講習会を実施しました。シラバスで紹介された図書や教員指定図書も積極的に収集し、利用しやすい蔵書整備に努めています。こうした活動のおかげで、

附属図書館長 稲田 晴年

幸いにも貸出人数や貸出冊数などが大幅に増加しました。

とはいっても、大学附属図書館の利用者は大学関係者だけとはかぎりません。地域との連携を考えて防災関係資料を充実させ、県立大学と短期大学部所蔵資料のリストを作成し、県防災センターにも配布しています。そして学外者による施設利用を促進するため、県内公共図書館・関係機関に本図書館の広報誌を配布し、静岡市広報にも図書館紹介記事を掲載しています。

以上の活動は、今後もさらに継続・発展させなければなりませんが、現在はまだ限られたものでしかない映像資料の充実も、今後の大きな課題のひとつと言えるでしょう。現代の学生の読書量は残念ながら減少傾向にありますが、映像に対する関心は大きくなっています。図書館2階のAVライブラリーにはDVD等の映像資料が集められていますが、まだ十分ではありません。特に映画に関しては、不特定多数の人間が鑑賞できるように、著作権問題をクリアしたソフトを購入しなければならないなど、大きなハードルがあります。しかし今後の需要を考えれば、充実させるべき分野であることは確かです。

現代の図書館に求められるほとんどの機能を附属図書館はすでに備えており、今後はその一層の拡充が望まれます。任期中に質と量のふたつの面で、それらの機能を少しでも拡充できればと思っております。

(*附属図書館作成パンフレット「グローバルILLに参加しました 海外へも文献複写を依頼できます」から一部引用。)

《本学教員からの寄贈著書》

図書館では、出版された先生方の著作の寄贈をお願いしています。

平成21年2月から4月までに図書館に寄贈していただいた先生方の著作は次のとおりです。

・**湖中 真哉 先生（国際関係学部）**

『フィールドワーク実習報告書』 平成17～19年度 富沢寿勇、玉置泰明、湖中真哉共編 静岡県立大学国際関係学部国際行動学コース発行 (382.154/Sh94)

・**津富 宏 先生（国際関係学部）**

『犯罪からの社会復帰とソーシャル・インクルージョン』 津富宏ほか著 現代人文社 (326.56/N77)

・**西野 勝明 先生（経営情報学部）**

『新公共経営（NPM）の課題と今後の方向』 西野勝明著『県庁を変えた公共経営をめざして』 県庁編 時事通信社 (318.254/Sh94)

・**山田 浩 先生（薬学部）**

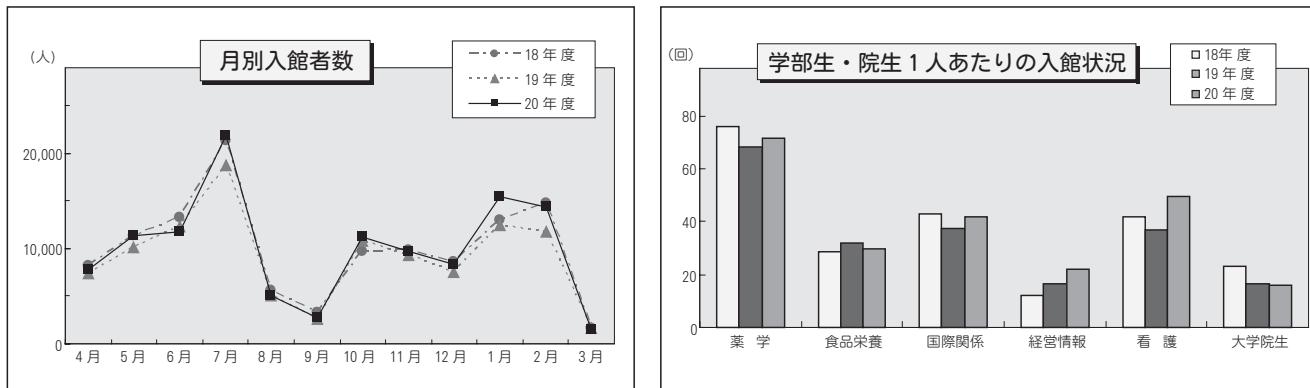
『創薬育薬医療スタッフのための臨床試験テキストブック』 山田浩ほか編集 メディカル・パブリケーションズ (499.4/N39)

統計で見る附属図書館の利用状況

－平成20年度利用統計の結果から－

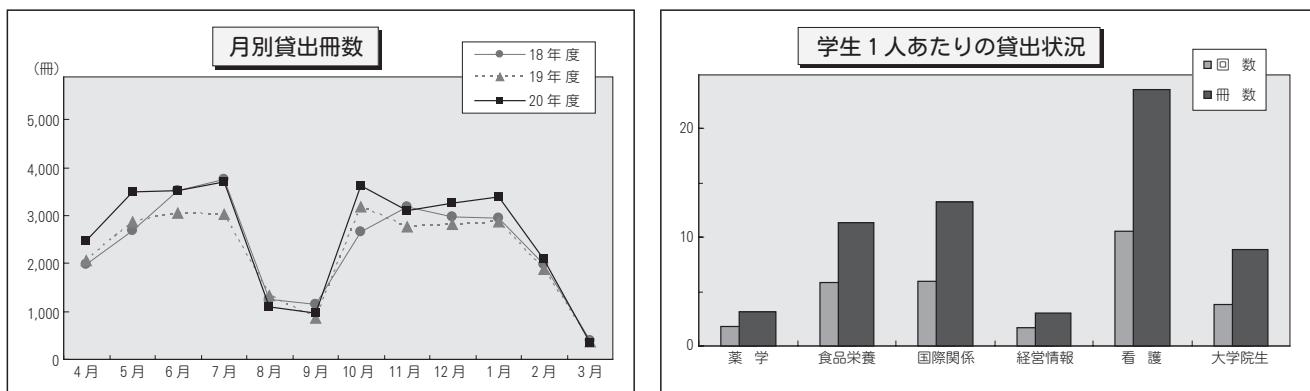
1. 入館者数

インターネットや電子媒体資料の普及などにより図書館の入館者数は減少傾向にありました。しかし、図書館サービスの向上、図書館情報管理システムの更新などにより、平成20年度の入館者数は121,172人と3年ぶりに増加しました。

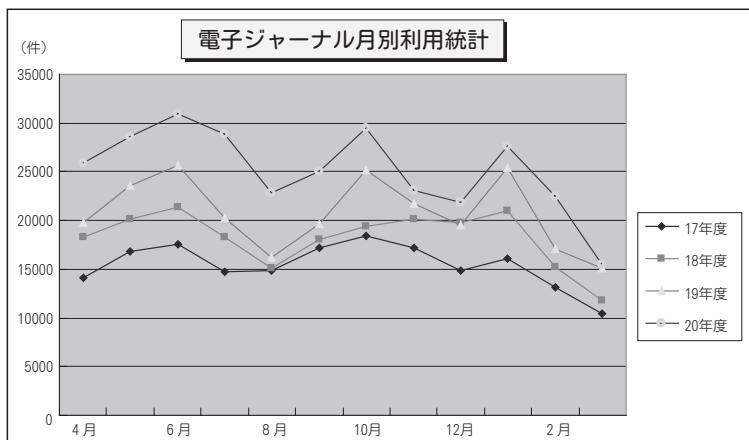


2. 貸出冊数

貸出冊数は、図書と視聴覚資料の貸出された数値です。平成20年度の貸出冊数は25,272冊、貸出人数は11,892人と、4年ぶりに貸出冊数が増加しました。学部によっては、図書や視聴覚資料以外に外国雑誌や新聞、電子ジャーナル、データベースもよく利用されています。



3. 電子ジャーナル利用統計



電子ジャーナルの利用は、年々増加の傾向にあり、平成20年度は302,317件の利用がありました。

特徴的なことは、自然科学系の「Science Direct」「American Chemical Society」「WILEY InterScience」が、利用の約7割を占めていることがあげられます。

集計タイトル名：American Chemical Society、
Science Direct、WILEY InterScience、Nature Publishing Group、WILEY-BLACKWELL Synergy、EBSCO Academic Search Elite、EBSCO Business Source Elite、MEDLINE with Full Text、SciFinder Scholar

SPORTS CONCEPT 平成21年度 開学記念行事開催!! GATEKEEPING

春の恒例行事となった開学記念行事が4月24日(金)に行われました。今年で18回目の開催となります。

午後3時半より5時半まで、「先輩と語ろう～社会へはばたくために～」と題して、各界で活躍している卒業生の皆さんと、ご自身もOBである木苗学長をパネリストとしてシンポジウムを行ないました。ご自身の経験から社会に出てはばたける（活躍できる）ために、学生生活の過ごし方、在学生へのメッセージを語っていただきました。

当日のコーディネーターとパネリストは以下の方々です。

コーディネーター：原田裕見子さん（平成6年3月国際関係学部卒、フリーアナウンサー）

パネリスト：木苗直秀（学長）

黒羽子孝太さん（平成8年3月薬学部卒、本学薬学部助教）

鈴木智恵さん（平成20年3月経営情報学部卒、静岡県建設部島田土木事務所勤務）

常賀由子さん（平成7年3月食品栄養科学部卒、厚生労働省関東信越厚生局勤務）

藤原啓之さん（平成9年3月国際関係学部卒、（株）アルバイトタイムズ勤務）

水越秋峰さん（平成18年3月看護学部卒、看護学研究科修士1年、元静岡県立総合病院勤務）



左から、原田さん、木苗学長、黒羽子さん、鈴木さん、常賀さん、藤原さん、水越さん

午前中は、昨年に続いて第6回目となる運動会を行ないました。今年は青空の下、グランドを使っての開催となり、約100名の参加がありました。障害物リレー、綱引き、玉入れなどが行われ、学生に混じって先生方も多数参加され、大変盛り上りました。



綱引き



リレー



夕方からは、「はばたきのつどい（懇親会）」を行ないました。最初にサークル・部活動で大いに活躍した団体に与えられる「おおとり会賞」の表彰式が行われ、新入生を対象とした様々なイベント開催により学生間の交流やサークル活動の活性化等に大きく貢献している「新入生歓迎委員会」と、音楽の素晴らしさを広め、他大学との交流にも積極的に取り組んでいる「ギター＆マンドリン部」が表彰されました。

また、午前中に行なわれた運動会の表彰が行われ、恒例となった大きなケーキが優勝チームに与えられると、会場は大変盛り上りました。そのほかアトラクションとして、ジャズダンス部によるエネルギーッシュなダンスと、GOLD ROWDIESによる華やかなチアリーディングが披露され、懇親会は大盛況でした。



GOLD ROWDIES



懇親会の様子

「文化の丘づくり事業推進に関する協定」を締結

3月11日(水)、静岡県立中央図書館にて、「文化の丘づくり事業推進に関する協定」の締結式が行われました。

この協定は、県立大学、県立美術館、県立中央図書館、県埋蔵文化財調査研究所の4機関が連携し、静岡市駿河区谷田の丘陵地域を、県の文化振興やまちづくりに貢献する地域に発展させていくことを目的としたものです。

これまでにも様々な事業が4機関相互の連携によって実現してきましたが、協定が正式に調印されたことを契機に、より魅力的な事業展開が期待できそうです。

協定に調印した4機関の代表者：（写真左から）

県立中央図書館の天野忍館長、県立美術館の宮治昭館長、
県埋蔵文化財調査研究所の清水哲所長、本学の木苗直秀学長

（肩書きは、21年3月現在）



協定を結び、握手を交わす4機関の代表

学内広報誌「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・学生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

教育研究推進部・広報室（はばたき棟3階）宛にお願いします。

E-mail:koho@u-shizuoka-ken.ac.jp